

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

7月



「明るい家庭づくり」作文

家庭の役割、在り方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和五年度は、小・中学校から一、八七〇点の応募がありました。市の優秀賞を受賞した作品を二か月にわたって紹介します。なお、優秀賞、優良賞受賞作品は、倉敷市のホームページに掲載しています。

● ぼくはおにいちゃん

菅生小学校 一年 大村 由詩 おおむら ゆうた

ぼくは四にんきょうだいの一ばんめです。おとうとは三さい、一さい、一さいです。おにいちゃんは、まいにちいそがしいです。しょうがつこうにいたり、しゅくだいをしたり、ごはんをたべたり、おふろにはいったりします。

おにいちゃんは、たいへんです。つかれます。しゅくだいをしているときでも、うるさかったり、じやまされます。ごはんをたべているときは、ふざけるからおこります。ごはんをたべさせてあげます。おふろでは、あそんであげます。おかしはわけっこするから、すぐなくなります。ぼくがすくなくてもがまんするときがあります。

おにいちゃんはさみしいです。おとうさんとおかあさんは、おとうとたちのことばかりします。ぼくには、「おにいちゃんだからできるでしょ。」といいます。ぼくのこととしてはいいです。

でも、ぼくはおにいちゃんによかったです。おとうとたちはかわいいからです。だいです。おせわするのはたいへんだけれど、おとうとたちがわらっているから、うれしくてがんばれます。おにいちゃんはりっぱなおしごとだとおもいます。ぼくはこれからずっと、おにいちゃんをがんばります。がんばるから、ほめてくれないかな。こぼれくれないかな。

● バタフライと妹

長尾小学校 五年 福井 颯太 ふくい そうた

ぼくは、泳ぐことが大好きで、今日までコツコツ泳ぎを続けている。そのスイミングでは二ヶ月に一回進級テストがあり、そのテストがぼくを苦しめていた。

順調に合格していたテスト。だが、今回のバタフライ五十メートルを、決められたタイムで泳ぐテストには大苦戦している。バタフライ自体がとにかく苦手。苦しいし、リズムもバラバラになるし、体がいたくなる。もう四回も落ちていた。そのうちに後から習い始めた二歳下の妹がどんどんぼくの級に追いついてきた。あせる気持ちとくやしい気持ちで逃げ出したくなった。

最初は妹と一緒にモヤモヤした気持ちが大きかったけど、「お兄ちゃん、バタフライしんじいよね。どうしたら腕が上に上がるん？」と聞いてくれた。二人で一緒に泳ぐのが楽しいと感じるようになった。

母に聞かせるように、そつとつぶやいた。追い付かれるのだけはどうしてもいやだったからだ。しかしそんな母には全部お見通しだった。

結果は、まず妹が名前をよばれた。合格だった。でも喜んでいない。時間がたつてはくの名前がよばれた。合格だ。

「ここをやめるのは簡単だよ。一緒にひみつの特訓してみない?」

「二人とも、よかったね。本当におめでとう。」と母が強くだきしめてくれた。なんか声が出る、えーと思つて顔を上げたら母はすごく号泣していた。そんな母を見て妹も泣き出した。妹もぼくの苦しい気持ちに気付いていたのだろう。気が付けば三人でくっついていて、ささいなことでも喜んで

手回し方を練習したり、バタフライのリズムを何度も確認したりした。今度こそ絶対大丈夫だと思つて挑んだテストも後〇九秒でまた落ちてしまった。ついに妹がぼくの級に追いついた。もう今度こそ本気でやめ

泣いてくれるやさしい家族と、これからいろいろなことに挑戦しながら、どんな困難なことに直面しても乗りこえていきたいと強く思った。

●私の大好きなおばあちゃん

真備東中学校 二年 宮本 菜月 みやもと なつき

「たっいまー。」

私は玄関のドアをあける。

いつも両親は帰ってくるのが遅く、小学校低学年の頃はいつもおばあちゃんの家に戻っていた。私の家からおばあちゃんの家まではとても近いので、長期休みに入ると兄と一緒に毎日おばあちゃんの家に行っていた。おやつをたくさん食べて、あやとりや折り紙、おはじきなんかで遊んだり、ボールで遊んだり散歩をしたりする。歩いて買い物に行ったりいっしょに料理を作ったりもした。おばあちゃんの家は裏山をつくしを取り、ヨモギを取ったりして、たくさんのごちそうを経験できてとても楽しかった。おばあちゃんに強くあたってしまったこともあるけれど、こんなふうにおばあちゃんと過ごすのがとても楽しくて嬉しくてしかたがなかった。

しかし、高学年になっていくにつれて、おばあちゃんの家へ帰ることが恥ずかしくなっていた。よく家の前に立ってれていた

けれど、他の人に見られるのが恥ずかしいから家の前に立つのはやめてほしいと言ったこともあった。友達やまわりの子が自分の家の鍵をもっていたこと、一人で留守番をしていることが羨ましかった。母から自分の家の鍵をもらってからは、だんだんとおばあちゃんの家へ帰らなくなっていた。長期休みに入っても、お昼ご飯を食べて少し話をしたらすぐ帰るようになっていた。

中学生になってからはおばあちゃんの家に行く行かなくなっていた。長期休みに入っても、毎回おばあちゃんの家へ、一生懸命作ってくれたお昼ご飯を歩いて届けに来てくれた。お昼ご飯以外にも、おやつに食べるとねと言って、ヨーグルトや果物なんかも持て来てくれる。

「いつでもおばあちゃんの家へ来てええけん。でもわざわざ家に来るのも大変じゃもんなあ。」

そういつて笑いながらおばあちゃんは言うてくれる。私はいつも笑って誤魔化してしまいうけれど、心の中では申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。

おばあちゃん私のことや私の家族のことをよく心配してくれる。わざわざ私の家に野菜や果物を持って来てくれたり、お店で買った惣菜を持って来てくれたりする。私だけではなく昼すぎに仕事から帰って

る母の分のお昼ご飯を作って持て来てくれることもある。他にも、私が友達と遊びに行くというのを伝えたときはいつも「これで楽しんでおいで。」と言ってお小遣いをわたしてくれるのだ。

お昼ご飯を届けに来てくれたときは私の家へいっしょに話をする。最近あったことや最近暑いね、とか、そんな他愛もない話をする時間がとても楽しい。おばあちゃんは私と会ったとき、身長を比べたがる。全くといっていいほど私の身長は伸びていないのになんか「なっちゃんまた背伸びしたじゃろ。」と言ってくれる。私の身長は小学六年生から変わっていない。たぶんおばあちゃんがどんどん縮んでいるだけ。このことを本人に伝えたらどんな反応をするのだろうか。そんなことはない、と言っのか。

一度おばあちゃんが「いつも同じようなおかずばかりでごめん。」と言ってきた。私はすぐ否定できずにいた。おばあちゃんが私のために、お昼ご飯を作ってくれて、私の家まで届けに来てくれて、そしてたくさん話をしてくれるだけで嬉しいんだよ。そんなことは恥ずかしくて言えなかった。けれどいつか面と向かって言いたいと思う。

「なっちゃんの結婚式までは元気に

生きるといけん。」とおばあちゃんに言うていたけれど、私はおばあちゃんに自分の子どもを見せてあげたいな。それまで絶対元気で長生きしてほしい。「ひいおばあちゃん」と呼ばれて笑顔になるおばあちゃんを私は見たい。

今日はおばあちゃんがお昼ご飯を届けてくれる日。今日はどんな話をしてくれるだろう。そして私はどんな話をしよう。とても楽しんだ。今度は久しぶりにおばあちゃんの家に行こうかな、おばあちゃん、喜んでくれるかな。

「ピンポン」

チャイムがなった。私は玄関のドアを開ける。そこには私の大好きなおばあちゃんが立っていた。

(おわり)



岡田小学校 2年 岡野 涼花 (令和5年度)

「カワウソとさかなをたべたい」(水彩)

動物が絵の中心となるよう自分と動物の大きさのバランスを工夫しました。色をていねいにぬり、本物の様にかきました。